

『デ・エンテ』 第4章における存在と本質*

上枝 美典

1 序

我々は、トマス・アクィナス『デ・エンテ』第4章^{*1}で述べられる、被造物の存在と本質の区別を巡る議論について、次の順序で考察する。

1. それが如何なる問題であるかを明らかにする。
2. その問題に関して、これまでに示された若干の解釈を概観する。(これはもちろん、網羅的なものではない。今回は特に、オーエンスを中心に行われた最近の論争に注目する。)
3. 問題に対する我々の解釈を示す。
4. 我々の立場から、他の解釈に対するコメントを述べる。

2 問題点の指摘

トマス・アクィナスの『デ・エンテ』第4章に、次の様な論述が見出される。

全ての本質ないし本性は、その存在について何も認識されていなくても認識され得る。実際、私が、人間や不死鳥の何であるかを知性認識しながら、しかし、それが実在の世界に存在するかどうかを知らないでいるということがあり得る。故に、存在が本質ないし本性と別である事は明らかである。^{*2}

この箇所が含まれる『デ・エンテ』第4章の主題は、魂、天使、神といった、質料を持たない単純実体の本質の考察である。そして特に、天使の本質が、質料を持たない単純形相であるという意味では単純であるとしても、しかし、存在そのものである神の単純性には達していないという意味では、存在と本質からの、一種の複合体である事が明確にされる。

それ故、『デ・エンテ』第4章の議論全体は、天使などの実在的な事物における、存在と本質との言わば実在の次元での関わり具合が論じられているのであり、その様な事物の本質や存在に関して人間が持つ概念相互の関係が論じられているのではない。

しかし、我々が問題とするこの議論は、「人間」や「不死鳥」が実在しているかどうかを知らなくても、それらの「何であるか」を知る事が出来るという、言わば人間の認識に関する分析から、実在する事物の本質と存

* 『中世哲学研究』第11号、1992年、59-70ページ。

*1 テキストは次のものを用いる。文中の章、行の番号は、全てこれに従う。Thomas Aquinas, "De Ente et Essentia", in *Opera Omnia*, t.43, Leonine ed. (Rome, 1976) pp.369-381.

*2 *Omnis autem essentia uel quiditas potest intelligi sine hoc quod aliquid intelligatur de esse suo: possum enim intelligere quid est homo uel fenix et tamen ignorare an esse habeat in rerum natura; ergo patet quod esse est aliud ab essentia uel quiditate. (De Ente et Essentia, c.4, ll.98-103.)*

在の区別という、実在的な事実を証明しているように見える。それ故、ある研究者は、トマスのこの議論に対して、「明らかに安易な論理的秩序から形而上学的秩序への移行」を示すものであるという批判^{*3}を加えている。

しかし、トマスが無雑作にこのような移行を行うとは考えにくい。その事は、例えば、アンセルムスの神の存在論的論証(本体論的論証)に対する、トマスの慎重な批判を見れば明らかであると思われる。^{*4}

ところで、もしもここで「安易な移行」が行われていないとすると、少なくとも二つの解釈の可能性があると考えられる。一つは、この議論が、徹頭徹尾、概念の次元で行われているとする解釈である。後で見ると、オーエンスやウィペルは、この立場を取る。もう一つは、この議論が、徹頭徹尾、実在の次元に目を向けて行われているとする解釈である。例えばボビックなどは、この立場を取っていると思われる。

それ故、次の第2章では、これら二つの代表的な解釈を概観し、その後、第3章で、このテキストに対する我々の解釈を提示することにする。

3 様々な解釈の概観

3.1 オーエンス「聖トマス・アクィナスにおける何性と実在的区別」(1965年)

ジョセフ・オーエンスは、1965年に発表した論文「聖トマス・アクィナスにおける何性と実在的区別」^{*5}において、この『デ・エンテ』第4章の議論を次の様に解釈した。

II.98-103の議論は、基本的に、トマスにおける知性の二つの働きを考慮に入れて読まれるべきである。即ち、人間知性には、単純把握と判断という二つの働きがある。単純把握は、事物の本質を認識し、判断は、事物の存在に目を向ける。この箇所で行われている事は、単純把握によって捉えられた内容に、判断の対象である存在が含まれていないという事実である。

また、この単純把握によって捉えられた本質は、『デ・エンテ』第2章で論じられた、「無条件的に考察された本質」(essentia absolute considerata)である。然るに、無条件的に考察された本質は、如何なる個的存在にも関係せず、実在的存在・概念的存在的の両方に対して、対等に関わるものである。それ故、それを限定的に実在的なものとする事は出来ない。

また、この議論が本質の単純把握を問題としている以上、「存在」の性格については何も明らかにされていない。それ故、この議論における「存在」が、限定的に、実在的な存在を意味していると考え事は出来ない。従って、この議論における本質と存在は、いずれも、実在するものとして考えられているのではない。それは単に、人間知性の単純把握によって捉えられる本質の内容に関する議論であり、この議論から、存在と本質の

^{*3} F.A.Cunningham, *Essence and Existence in Thomism: a mental vs. the "real distinction?"* (Lanham/New York/London, 1988) pp.244-245.

^{*4} Utrum Deum esse sit per se notum:

4. Praeterea, illud est per se notum quod non potest cogitari non esse. Sed Deus non potest cogitari non esse. Ergo ipsum esse per se est notum. Probatio mediae est per Anselmum, *Proslog.*, cap. XV, col.235, t.I; Deus est quo majus cogitari non potest. Sed illud quod non potest cogitari non esse, est majus eo quod potest cogitari non esse. Ergo Deus non potest cogitari non esse. Potest aliter probari. Nulla res potest cogitari sine sua quidditate, sicut homo sine eo quod est animal ratione mortale. Sed Dei quidditas est ipsum suum esse, ut dicit Avicenna, lib. *De intelligentiis*, cap.I. Ergo Deus non potest cogitari non esse.

Ad quartum dicendum, quod ratio Anselmi ita intelligenda est. Postquam intelligimus Deum, non potest intelligi quod sit Deus, et possit cogitari non esse; sed tamen ex hoc non sequitur quod aliquis non possit negare vel cogitare, Deum non esse; potest enim cogitare nihil hujusmodi esse quo majus cogitari non possit; et ideo ratio sua procedit ex hac suppositione, quod supponatur aliquid esse quo majus cogitari non potest. (*in I Sent*, d.3, q.1, a.2.)

^{*5} J.Owens, "Quiddity and Real Distinction in St Thomas Aquinas," *Mediaeval Studies*, XXVII (1965) pp.1-22.

実在的区別を証明する事は出来ない。寧ろ、ここで明らかになっているのは、それらの単なる概念的な区別である。

しかし、トマスはここで、そのような概念的区別を示そうとしているのではない。II.98-103の議論は、実は、II.98-146にわたる、より大きな論証の出発点として読まれるべきである。この長い論証は、存在を本質とする神の実在性の論証である。

そこで神の存在が証明された後、II.98-103の議論は、存在と本質との実在的区別を意味するものとして理解し直される。存在を本質とする神の実在性が論証される事によって、存在そのものが、実在する本性である事が証明される。しかし、本性としての存在は、神そのものであり、その様な本性としての存在が、そのままの形で被造物に分有される事はありえない。それ故、被造物に分有された存在は、「本性」即ち「本質」ではあり得ない。ここに来て初めて、被造物における本質と存在の実在的区別が、論証される。

従ってまた、被造物における存在と本質の実在的区別は、本質直感によって見て取られるものではなく、推論によって到達されるものである。

オーエンスの解釈は、このように要約できるだろう。その議論のポイントは、次の点にある。II.98-103で明らかにされるのは、本質と存在の概念的区別である。しかるに、トマスはこの章で、天使や魂における、存在と本質の実在的区別を論証しようとしている。それ故、その後の議論のどこかで、概念的区別から実在的区別への移行が為されなければならない。その移行を行うのは、II.127-146の、存在そのものたる神の存在論証においてである。神の存在論証によって、存在が本来、本性として自存するものである事、即ち、存在の実在性が証明される。しかしその本性は、無限であり、そのままの形で分有される事は出来ない。それ故、被造物の存在は、本性ではない。これが、被造物における本質と存在の実在的区別の意味である。

3.2 ウィペル「実在的区別へ至るアキナスの道」(1979年)

ジョン・ウィペルは、1979年に発表した「実在的区別へ至るアキナスの道」*6の中で、このオーエンスの解釈を踏まえた上で、『デ・エンテ』第4章の議論に対する解釈を示した。その解釈は、基本的にオーエンスと同じ立場に立ちながら、オーエンスの解釈に若干の修正を加えるものである。

ウィペルの解釈は、次の二つの点で、オーエンスの解釈と共通する。1) 被造物における存在と本質の区別を証明するためには、II.98-103の議論だけでは不十分である事、2) この箇所の論証は、II.98-103の範囲を越えて進められている事である。

ウィペルは、この箇所の論証の構造に注目し、II.93-146の議論を、大きく三つに分ける。即ち、第一段階がII.96-103、第二段階がII.103-126、そして第三段階がII.127-146である。

第二段階において、「本質が存在であるようなものが存在するとすれば、そのようなものは、唯一つでしかあり得ない」事が論証され、第三段階で、被造物における存在の作出因としての、存在そのものたる神の実在が論証される、と彼は解釈する。

テキストのこのような分割に従って言えば、オーエンスは、この論証の第三段階が終了した時点で、被造物における存在と本質の実在的区別が証明されると解釈したと言える。

さて、ウィペルは、オーエンスのこの点を批判する。即ち彼は、被造物における存在と本質の実在的区別が証明されるために神の実在が論証される必要はなく、「本質が存在であるものがあるならば、それは、論理的に、ただ一つでしかあり得ない」という事が証明された時点で、即ち、論証の第二段階が終了した時点

*6 (6) J. F. Wippel, "Aquinas's Route to the Real Distinction: A Note on De ente et essentia, c.4," *The Thomist*, XLIII (1979) pp.279-95.

で、実在的区別が証明されているのだと主張する。

ウィペルは、オーエンスの解釈を念頭に置いた上で、次の様に述べている。

確かにトマスは、他の著作において、最初に神の存在論証を提示したり、あるいはそれを暗黙の了解としたうえで、神以外の事物における本質と存在の事実的な異なりへと進む事がある。しかし、ここではその様に進んでいない。ここでは寧ろ、本質と存在が同一であるものが一つ以上存在し得ない事から、それ以外の全ての事物における、本質と存在の事実的な異なりを推論しているのである。

このように、ウィペルは、オーエンスの解釈をほぼ受入れながら、実在的区別が議論のどの段階で証明されているかという点で、オーエンスを批判する。オーエンスが、実在的区別は、存在そのものである神の存在が論証によって認識されていることを前提しなければならないと主張するのに対し、ウィペルは、実際にその様な神が存在する事が証明されなくても、仮に本質と存在が同一の物があるとしたら、その様なものはただ一つでしかあり得ないということが論理的に証明された時点で、それ以外の事物における存在と本質の実在的区別が証明されると主張するのである。

3.3 マクドナルド「アキナスの『デ・エンテ』における存在本質論」(1984年)

マクドナルドは、1984年の論文「アキナスの『デ・エンテ』における存在本質論」*7の中で、『デ・エンテ』のこの箇所の論理構造を分析する事によって、オーエンスとは異なる解釈を提出した。

先ず、マクドナルドは、11.94-96の「本質ないし本性の概念に含まれていないものは何であれ、外から到来して、本質との複合に入る」という表現を、「或る事物に属し、かつその事物の本質ないし本性の部分でないものは何であれ、…」と解釈する。何故なら、「或る事物の本質の内容に含まれないもの」は無数に存在するのであるが、それら全てが、その事物との複合に入る訳ではないからである。例えば、「人間」の本質に「犬」は含まれないが、「犬」が「人間」の本質と複合に入る訳ではない。それ故、ここでトマスは、現実に存在する事物に目を向け、その事物に属しているもので、その事物の本質に含まれていないものと、その本質との関係を考えているのである。

議論の出発点をこのように解釈する事によって、マクドナルドは、この論述の出発点が、オーエンスが主張するような概念的な次元ではなく、実在する具体的事物に関する考察を含んでいると主張する。彼は次の様に述べる。

「この議論が、概念的領域において始まっているのではないと理解する事は、この議論の性格を理解するために、決定的に重要な事である。」

更に、マクドナルドは、トマスがこの論述を、以下の様な論理構造に基づいて進めていると考える。

1. 事物の存在は三つの仕方でも説明される。
 - (a) 事物の存在がその本質の部分である。
 - (b) 事物の存在が、その事物の本質の外からやって来て、本質との複合に入る。
 - (c) 事物の存在が、その事物の全本質そのものである。
2. (a) に該当するものはない。
3. (b) に該当するものが在るとすれば、それは一つ以上ではない。

*7 S. MacDonald, "The *Esse/Essentia* Argument in Aquinas's *De ente et essentia*," *Journal of the History of Philosophy*, XXII:2 (1984) pp.157-172.

4. それ以外の全てのものは、(b) に該当する。

このうち、(a) の可能性が、(2)-(4)(Wipfel の第 1 段階に相当) において検討され、次に、(c) の可能性が、(5)-(11)(同じく第 2 段階) において考察されているのだと解釈する。

即ち、もしも、事物の本質に、その事物の存在が、部分として属しているのであれば (a の場合)、その事物の本質を認識する時、必然的に、その事物の存在も認識されるはずである。存在について何も知らなくても、その本質を理解する事が出来るという事実は、直ちに存在と本質の實在的区別を結論するものではないが、少なくとも、或る事物の存在が、その事物の本質の一部を構成するという形で関係しているのではない事の証明となる。

この議論から、存在が本質の一部を構成しているのではないことが結論されるが、それは直ちに、存在と本質の實在的区別を証明するものではない。何故なら、存在が本質の一部ではないということは、「存在が本質の外に在る」と「存在が本質の全体である」という、二つの可能性を残すからである。それ故トマスは、(5)-(11) において、後者のケースを考察する。その結果、たとえ存在が本質の全体であるようなものが存在するとしても、それはただ一つでしかあり得ない事が結論される。

議論の出発点において、或る事物が実在している事が想定され、今、存在と本質が関係する三つの可能性の内、二つが否定された。それ故、事物の存在と本質は、残る一つの仕方、即ち (b) によって関係するのが必然である。そして、この (b) において前提される本質と存在の区別は、實在的な区別である。

マクドナルドは、このように主張する。

このマクドナルドの立場から、オーエンスに加えられる批判は、次の通りである。

オーエンスは、「何性と實在的区別」*8で述べているように、この議論の出発点を、いわゆる「本質の内容からの証明」(Intellectus Essentiae Argument) と同一視している。しかし、「本質の内容からの証明」とは、

1. 全て本質の部分でないものは、本質と異なる。
2. 存在は本質の部分でない。
3. 故に、存在は本質と異なる。

という形態を取る。しかし、既に見たように、『デ・エンテ』の議論において、この形の論証は行われていない。

もしもオーエンスが考えるように、この議論の出発点が、単に概念的レベルでの本質の考察であるならば、その考察は、いずれかの段階で、實在のレベルへと移し変えられなければならない。それ故オーエンスは、作因の秩序による神の存在論証の部分が、その様な移行を行っている箇所であると考えた。そして、その様な論証が成立して初めて、概念から實在への移行が完了し、存在と本質の概念的区別が、實在的区別として了解されると解釈した。しかし、既に指摘したように、この議論の出発点は、単に概念的な領域ではなく、眼前の事物の實在に関わっている。それ故、この議論は、最初から最後まで、実在する事物に関わっているのであり、概念の領域から實在の領域への移行が行われている訳ではない。

以上のマクドナルドの解釈は、1.126 で述べられる存在と本質の区別が、既に實在的なものであると主張する点で、ウィペルと一致する。しかし、ウィペルが、議論の第一段階をオーエンスと共に単に概念的な考察であるとし、それ故に、第二段階の議論が、概念から實在への移行を行うものであると考えるのに対し、マクドナルドは、概念的区別から實在的区別へという構造解釈そのものを否定し、第一段階が、存在が本質の部分

*8 Owens, op.cit. p.5 ff.

である事の否定であり、第二段階が、存在が本質の全体である事の否定を意図するものであると考える点で、ウィペルの解釈とは根本的に異なるものである。

3.4 ボビック『アキナスにおける有と本質』(1965年)

以上に見た三人の解釈は、いずれも、我々が問題としている『デ・エンテ』第4章の議論(II.98-103)が、単独では成立せず、より大きな証明の一部を形成していると考えられる。しかしこのような解釈とは別に、この議論が単独で、存在と本質の實在的区別を証明していると解釈する研究者もいる。その様な研究者の一人に、ボビックがいる^{*9}。

ボビックの解釈に特徴的なのは、彼が、「本質」という言葉の意味を『デ・エンテ』第1章の論述に結びつけて、厳密に考える事である。

ボビックは、この議論の場として、自然本性的な認識能力を持つ人間が、現実の自然的世界に個的に存在する事物を認識している状況を想定する。従って、その議論は、そもそも事物にとって本質とは何か、また、そもそも何故人間が事物の本質を認識できるのかということに関する、トマスの見解を前提する。ボビックによれば、その様な見解は、既に『デ・エンテ』第1章で述べられている。即ち、本質とは、事物が、それによって、「何であるか」という問いに対する内容を持ち得るような、実在における何かであり、また、本質とは、それによって、事物が可知的になるものである。人間知性は、本質を捉える単純把握において、その非質料性に関しては現実態に在るが、内容の限定性に関しては、可能態に在る。本質は、この意味で可能態に在る知性に対して、現実態として働きかけ、知性認識を認識内容の側面において現実化するものである。

このような観点から見られるならば、或る事物の本質の中に、その事物の存在が含まれていないと言われる時、その意味は、オーエンスが言うように、単に、本質が無条件的に考察され得るということだけではなく、目の前に実在している事物の本質が、まさにその「実在する」という事実を含んでいないということに重点が置かれる事になる。そしてこの点は、トマスのテキストにも一致する^{*10}。人間に、本質に関する認識内容を与えるのが、当の事物の本質であり、そして本質は、自らの真の姿をそのまま人間に与えるのであれば、その与えられた内容に「実在する」事が含まれていないという事実は、実在している本質が、「実在する」という内容を持っていない事を意味する。そして、この事が、事物における本質と存在(実在)の、實在的な区別を証明するのに、十分な根拠となる。ボビックは、凡そ、このように考えるのである。

4 我々の解釈

以上で、現代の代表的な解釈の一部を概観したので、次に、この箇所の論述に対する我々の解釈を述べる。

『デ・エンテ』の論述全体の構造は、神・天使・魂・質料的事物という世界の構造を前提し、それに沿って論じられている。問題となっている箇所は、非常に大きい論述のごく一部である。我々は、それが、1.36から始まり、第4章の最後まで続く、論証的記述であると考えられる。即ち、1.36から、次の様に述べられている。「しかしそこ [1.33の「魂や知性的実体」を指す]において、形相と存在の複合が在る。この事から『原因論』第9命題の注解において、知性的実体は形相と存在をもつものであると述べられている。ここでの「形相」は、その単純な何性ないし本性の意味で理解されている。」

この論述に続いて、1.41で、トマスは次の様に述べる。「これがどの様にしてであるかを見る事は、平易で

^{*9} J. Bobik, *St. Thomas Aquinas on Being and Essence*. (Notre Dame, Ind., 1965).

^{*10} *tamen ignorare an esse habeat in rerum natura; (De Ente, c.4, l.101.)*

ある。」

さて、この1.41の表現において、「これ」は、何を指すであろうか。一見すると、これは、II.36-37の、「そこにおいて形相と存在の複合が在る」を指すように見える。もしそうであれば、単純実体における形相即ち本質と存在の複合に関する論証が、この直後から始まっていると考えなければならない。しかし、その後、1.42以下の論述において、その様な証明が、実際に始まっているであろうか。

先ず、II.42-50の箇所、結果は原因なしに存在し得ないが、原因は結果なしに存在し得る事から、質料は形相なしに存在し得ないが、形相は質料なしに存在し得る事が述べられる。何故なら、形相は質料に存在を与えるものであり、質料の存在の原因だからである。

形相が存在するために、必ずしも質料を必要としないのであれば、何故、質料においてしか存在し得ないような、質料的形相というものが見出されるのか。それに答えるのが、続く箇所である。

トマスはそこで、第一で純粋な現実態である「第一の根源」と、それからの「隔たり」という考えを導入する。質料においてしか存在し得ないような形相が在るならば、それは、その形相が、第一で純粋な現実態である第一の根源から隔たっているという、将にその理由によるのである、とトマスは言う(II.51-54)。形相が質料においてしか存在し得ないという事が、純粋現実態からの隔たりによるとすれば、その様な隔たりの無いものは、質料を離れて存在し得るはずである。そう考えて、トマスは、次の様に述べている。「従って、第一の根源に最も近い諸々の形相は、質料なしに自存する。」(II.54-56)

しかし、このような議論から、何が明らかになったのであろうか。少なくとも、初めに述べられた、「そこにおいて形相と存在の複合が在る」ということは、なんら証明されていないように思われる。何故なら、この議論では、質料・形相・第一で純粋な現実態などの用語は用いられたが、「存在と形相(または本質)」という図式は現れていないからである。

寧ろ、II.42-60の議論は、II.59-60で述べられている、知性的実体において、本質ないし何性が、そのものの形相と別でない事の証明を目指しているように思われる。それ故、1.41の「これ」(hoc)は、知性的実体において形相と存在の複合がある事を指しているのではなく、直前の箇所(II.39-40)で述べられた、「そこでは、形相は、何性ないし単純な本性と理解されている」を指していると読むべきである。

それ故、II.42-60の議論は、『原因論』第9命題注解の「形相と存在」を、「本質と存在」と読み替えるための手続きであると解釈できる。この手続きによって、知性的実体における存在と本質の複合という説を、『原因論』という古典的著作によって権威付けた後、そこから派生する、単純実体と複合実体における本質の三つの違いについて述べ、その上で、1.90から、この説の理性的な論証を始めるのである。先行する思想に言及する事によって歴史的視野を獲得した上で、理性による論証を行うというこの過程は、知性的実体における質料と形相の複合を論駁したII.8-36の議論でも見られたものである。

従って、1.90から始まる次の言葉は、知性的実体における本質と存在の複合を、論証によって証明する箇所の開始を意味するはずである。

「それ故、このような実体は、質料を持たず形相だけであるが、しかし、それらにおいて、あらゆる意味における単純性がある訳ではなく、またそれらが純粋現実態であるのでもなく、却って、可能態との混合を持っている。」

この言葉は、トマスが、以下に行う論証の基本的視座を明らかにするものとして重視されるべきである。ここで明確に述べられているように、トマスは、『原因論』に述べられる「形相と存在の複合」を、本質と存在の複合と読み替えた後、更にこれを、「可能態と現実態の複合」として論証しようとしている。

現実態と可能態の複合という観点は、ここで初めて現れるものではない。既に、II.51-60において、形相が質料に依存しないのであれば、なぜ、質料においてしか存在し得ない質料的形相があるのかという問題に対し

て、それが、純粹現実態としての第一の根源からの隔たりによって附帯するという考えが提出された。第一の根源が純粹現実態であり、その根源から出てくるものは全て、その根源に対して、一定の距離を持っているというこの図式からは、容易に、第一根源以外のものにおける、現実態と可能態の複合という思想が出てくるであろう。しかしトマスはこの箇所では、その様な考えを正当化するための、如何なる論証も行っていない。

それ故、1.90 から、理性による論証に入った今、問題として残されているのは、その様な第一の根源が存在し、しかもそれが純粹現実態である事、そして、その他の事物が、可能態と現実態の複合という仕方で、純粹現実態から隔たっている事が示されなければならないのである。

そして、その後の論述は、基本的に、このような要請に従って進められているように思われる。

先ず、大きな意味で、本質と存在が異なる事が指摘され (ll.94-103)、次に、本質が存在であるようなものほただ一つしか在り得ない事が証明される (ll.103-119)。同時に、その様な唯一のもの以外の全てにおいて、本質が存在でない事が示される (ll.120-126)。トマスは、当然の様に、本質が存在でないものの中に、知性的実体を含めている (ll.123-126)。この ll.94-126 は、全体として、「存在=本質」であるものが一つ以上存在し得ない事の証明である。

次に、本質が存在である唯一のものが、存在を持つ他の全てのものの原因であり、それが神である事が証明される (ll.127-146)。

以上で、第一原因が存在する事、そして、第一原因の本質が存在である事が証明された。しかしこれで終わりではない。次に、その様な原因が、純粹現実態である事が証明されなければならない。その証明が、ll.147-153 で為されているのである。

1.90 から始まる、知性的実体における現実態と可能態の複合の問題に関するトマスの論述は、この ll.147-153 で、第一原因が純粹現実態である事が証明された時点で、一応の完結を見るのである。

この事は、直後の ll.153-166 で、トマスが二人の思想家、即ち、アヴェロエスとボエティウスを挙げ、それに対するコメントを述べている事からも伺えると思われる。特に、ボエティウスの思想として述べられている *quo est* と *quod est* あるいは *esse* と *quod est* の複合は、トマスの時代、天使の複合を論じる時に避けて通れない伝統的問題であった*11。それ故、ここでトマスがボエティウスを持ち出している事は、トマスが、この問題に関する自分なりの解答を示した後で、トマスの立場から、ボエティウスを解釈していると考え事が出来るのである。

即ち、トマスの主張は、天使において、質料と形相の複合はないが、存在と本質の複合が在る事、そして、その複合は、可能態と現実態の複合だということである。

第4章の残りの部分、即ち、ll.167-201 は、本質が存在である、第一原因が存在し、それが純粹現実態である事が証明された後、他のものどもが、それに対して、如何に関係しているかが述べられている。それは、既に指摘したように、諸事物の、第一原因に対する「隔たり」の具体的な姿について、論じられている箇所である。

以下に、もう一度、この章の構造に関する我々の解釈をまとめておこう。

『デ・エンテ』第4章は、大きく二つの部分に分かたれる。一つは、魂・知性的実体などが、質料と形相からの複合を持たないことを証明する部分である (ll.3-36)。この箇所はしかし、ll.1-3 において、魂・知性的実体・第一原因の三つが、「質料から切り離された実体」と言われている事を考えれば、第4章の主要問題ではなく、これらの事物における本質の在り方に関する考察の、準備的考察と位置付けられる。

*11 *quo est, quod est* という用語は、ボエティウスの『デ・ヘブドマディプス』に対する Gilbertus Porretanus の注解に由来する。この区別は、アレクサンダー・ハレンシスや、アルベルトゥス・マグヌスにおいて、重要な問題として扱われている。cf. Alexander Halensis, *ST I-IIae*, Inquisitio 1, Tractatus 2, Quaestio 2, Titulus 2, Caput 3. "De Compositione Prima ex 'quod est' et 'quo est'." Albertus Magnus, *ST*, Tractatus 4, Quaestio 20, Caput 2. "Qualis sit simplicitas Dei."

二つ目の部分は、魂と知性的実体において、形相と質料の複合とは別に、『原因論』で「存在と形相との複合」と言われている複合が在る事を証明する箇所であり(36-201)、本章の主要部分である。この問題は、ポエティウスに由来し、トマスの時代、既に伝統的な問題であった。

この問題に対するトマスの着想は、存在と形相の複合という問題を、純粹現実態としての神と、それ以外のものにおける現実態と可能態の複合として考える事であった。そしてその証明は、大きく、三つの段階に分かたれる。第一に、本質が存在であるものがあるとしたら、それは、ただ一つでしかありえない事(II.94-126)、第二に、それが、第一原因即ち神として実在する事(II.127-146)、そして最後に、それが、純粹現実態である事(II.147-153)である。この三つの段階を経て、唯一の第一原因が純粹現実態である事が証明され、結果的に、その他の事物における現実態と可能態の複合が結論されるという構造を持っている。

その後、アヴェロエスとポエティウスの思想に対する言及が為され(II.154-166)、自らの結論の歴史的な意義が一瞥された後、続いて、天使から質料的形相に至る形相の多様性が、可能態と現実態の複合という観点から、如何に説明されるかを述べて、この章の論述を閉じている。

さて、『デ・エンテ』第4章の論述全体を、以上の様に解釈する時、II.94-103の論述において示される存在と本質の区別の議論は、どの様に読むべきであろうか。

この議論は、既に述べたように、トマスが一つの世界構造を示す長い論証的記述の内、第一原因が純粹現実態である事の論証を構成する三つの論証の、第一の論証の一部である。そして、その第一の論証とは、既に見たように、この世界に、本質が存在であるものが在るとしたら、それはただ一つしか在り得ないことを証明するものである。従って、II.94-103の論述における存在と本質の区別を、実在的区別であると主張する根拠は何もない。寧ろ、存在と本質の実在的区別は、存在と本質の複合が現実態と可能態の複合である事が証明された時点で、明確に証明される。故にそれは、II.147-153において初めて証明されている。

要約して言えば、問題の箇所に示される存在と本質の区別を、実在的・概念的の何れに限定出来る如何なる根拠も、テキスト中に示されていない。神以外の事物における存在と本質の区別が実在的なものとして証明されるのは、II.147-153の論述に至った時である。

5 諸解釈に対するコメント

オーエンスが言うように、被造物の存在が、その本質と複合に入り得るような、実在的なものである事を証明するためには、存在それ自体の本性が如何なるものかを証明する必要がある。神の存在論証によって、存在は、無限なる純粹現実態という本性をあらわにする。そして、被造物における存在と本質の実在的区別は、存在の本性に関するこのような証明の後に論じられるべきである。このオーエンスの提案は、「存在の本性」や「存在の実在性」を問題にすべきだというものであり、この点は、一つの可能なトマス解釈を示していると思われる。

しかし、『デ・エンテ』第4章で、トマスがこのような仕方を実在的区別を主張しようとしていたと解釈する事には、多少の無理があると思われる。既に述べたように、トマスがここで意図しているのは、存在の純粹現実態としての第一原因と、その他の事物の、その原因からの隔たりを示す事である。第一原因が存在の純粹現実態であるがゆえに、全て存在するものはその原因の結果であり、存在に対して可能態に在る。それ故、存在する全てのものにおいて、可能態と現実態の複合が見出されるのである。

我々の解釈は、このような、第4章の論述全体の構造の解釈において、オーエンスの解釈と異なる。

同様の事は、ウィペルに対しても言える。我々の解釈は、ウィペルの構造解釈とも異なっている*12。

マクドナルドの提案は、実在的区別の問題を考える時に、『デ・エンテ』第4章の議論の構造を注意深く分析しなければならないとする点において、重要であると思われる。しかし、既に述べたように、彼の解釈も、我々の解釈とは異なる。

また、彼は、ポビックと同様に、議論の出発点を実在の次元に置く。この点は、トマスが、存在と本質の区別を考える時、あくまでも、眼前に実在する個物に目をやりながら思考している事を主張する限りにおいて、重要な指摘であると思われる。特に、ポビックが、この第4章の考察において、第1章で既に行われた「本質」に関する論考を想起する必要性を指摘している事は、重要である。確かに、トマスが「本質」と言う時、多くの場合、それは、実在する事物の存在と可知性の根源としての含意を持つ事は否定できない。それ故に、この第4章の論述においても、「本質」に、その様な意味を含めて読む事は可能であろう。しかし、トマスは、第1章で、本質の実在的性格について論じた後、第3章で、その本質の、無条件的考察について述べている。この無条件的考察において、本質は、その様な実在性を剥奪され、概念的存在・実在的存在の両方に対して中立的なものとして扱われる。それ故、この第4章の議論の中に、第1章の論述を読み込む事が出来るなら、同じ理由で、第3章の論述を読み込む事も出来るはずである。既に述べたように、オーエンス・ウィペルは、この第3章の論述を読み込んでいるのである。それ故、ポビックの解釈は、一つの可能的な解釈ではあるが、これによって、オーエンスらの解釈が否定される訳ではない。

6 結び

オーエンスは、トマスにおける存在と本質の関係を、アリストテレス、ギルベルトウス・ロマーヌス、スアレスらにおけるそれとの関連の中で見ようとしている。実在する事物について、その「何であるか」が、その「存在するか」と異なる事は、明らかである。しかし、その事から直ちに、事物における存在と本質の区別が実在的なものであることが帰結する訳ではない。何故なら、アリストテレスやスアレスは、そう結論しないからである。また、たとえ実在的であるとしても、それが、どの様な仕方でも実在的に区別されるのかは明らかでない。少なくともトマスにおいて、ギルベルトウス・ロマーヌスのように、存在と本質が、二つの事物(*duae res*)として、区別されると主張される事は出来ないだろう。

このような哲学史的な文脈のなかで、トマスにおける実在的区別の独自性を考える時、その独自性を、「本性として自存する存在」というトマス独自の思想との関連の中で見ようとする姿勢は、極めて重要であると思われる。しかし同時に、そのような着想の重要性は、トマスの実在的区別の独自性が、自存する存在という思想の独自性に基かなければならないという彼の提案の正当性を保証する如何なる根拠にもならない。自存する純粋現実態としての存在というトマスの中心思想が、被造物の存在と本質の区別の説に、どの様な思想史的な独自性を与えているかを明らかにするためには、更なる取り組みが必要であると思われる。

(筆者:京都大学研修員)

*12 ウィペルの提案の中に見られる諸推論の検討は、別の機会に譲る。